

平成 23 年度 第 3 回被服学教育 FD/ICT 活用研究委員会 議事概要

- I. 日時 : 平成 23 年 12 月 26 日 (月) 10 時 30 分から 12 時 30 分まで
- II. 場所 : 私立大学情報教育協会 事務局 会議室
- III. 出席者 : 高部啓子委員長, 鈴木美和子アドバイザー, 伊佐治せつ子委員, 軽部幸恵委員,
田中早苗委員
(事務局) 井端事務局長, 森下主幹, 松本職員

IV. 議事概要

1. 学士力の実現に求められる教育改善モデルについて

はじめに, 事務局より教育改善モデルの中間まとめ案に授業評価を付け加えることになった経緯が説明された。当初, 授業評価は原案になかったが, 理事会で教育改善モデルを審議した際に, 大学に提案する場合には必ず PDCA サイクルを明らかにすることが通例となっている。計画をどのように実施し, どのように点検・評価・改善に結びつけていくのか, そのシナリオがないと説得力が無い。これにより, これまでの教育改善モデル中間まとめ案「3. 授業運営上の問題および課題」を 4. とし, その間に新しい「3. 授業の点検・評価・改善」を入れる。4. の位置付けは, 授業運営上のガバナンスの課題となる。

では, 授業の点検・評価・改善は, 先生方による授業の振り返りをどうするのか触れてもらいたい。其々の新しい授業モデルを実施した場合に, どのように振り返りをするのかを起承転結として作りたい。何れのグループのモデルも, 授業の連携, 科目間の連携, そして産業化界との連携が大きな柱となっている。そのような連携を前提としたとき, どのような振り返りをするのが今日の課題である。本委員会の授業モデルも連携が話題となっている。連携をする前に, 授業の振り返りのために学生アンケートや試験, 実技の作品など, いろいろなデータが前提にある。例えば資料No.②.1 教育改善モデル (その 1) では, 2 年次までに基礎的なことを身につけさせ, 更に 3 年次 4 年次で考えていく, また資料No.②.2 教育改善モデル (その 2) は完全に卒業間際に目標を合わせているので 4 年間というスパンで授業の振り返りを学年進行に応じて行わなくてはならない。従来一つの授業が終わるとそれに対する授業評価を行う, というイメージがあったが, 今度は他の授業との連携があるので, その科目間の連携が 3・4 年生あるいは 2 年の後半からなど, いろいろな形で学年進行と科目間が平行に進行し, 最終ゴールは卒業時になる。そのようなことを踏まえたデータとは, どのようなものになるのか。そのデータの作り方も, 学年進行あるいは科目間でデータを出し合い, プラットフォームを作って学生の到達度の状況をネットで見てもらう。そして其々の意見を出してもらうことが必要なのではないか。このようなことが, 大方の委員会でも議論されて出てきている。

本委員会では実習があり, 教育改善モデル (その 1) では実践力のある先生方の協働があり, という少し特殊な仲間でもどのように進めて行くのが大事である。教育改善モデル (その 2) は商品企画に入るの, 完全に大学の先生方よりも外部の人をどのように巻き込んで授業評価, 到達度評価をやるのか, それを先生方が外部の人たちの意見を踏まえて, どのように授業改善して行くのか, その辺りで 2 つのモデルは異なる。このようなことを踏まえながら検討して頂きたい。

別の委員会では, 基礎・基本のところでは学習ポートフォリオとは別に学習評価シートを作り, 先生方のアウトカムズをやる意見が出ている。到達度で言うと, 例えば教育改善モデル (その 1) では材料の特性に始まってアパレル設計, プレゼンテーションとなっているが, これをもっと咀嚼して到達度のアウトカムズとなるアイテムを出してもらう。学生に, 「これについては自信がある, 自信がない。」とか, そのような聞き方で先生の方からアウトカムズの評価シートのフォーマットを作成し, 学生に○を付け

させる。試験や実習では出来ても、自信が無いところなどが浮かび上がってくるので、そのような学生の本当の姿を出してもらおう。学習ポートフォリオも本当の姿を書いてほしいが、どちらかと言うと学習ポートフォリオは就活の道具になりつつあり、自分の事に向き合って書くということが少ない。学生は出来たことより書かないので、出来ないことが出てこない。学習ポートフォリオだけでは信頼できないので、先生側から見た学生の到達度と共に学生の本音を出してもらわなくてはならない。学生から本音を引き出し、卒業までに自信のない部分を大学として組織的に補完する努力を大学はしなくてはならない。学生からデータを取り、それについていろいろな人が意見を言う。毎週の授業の中で情報交換をしながら点検改善する。どのタイミングで点検改善するのか、15週の途中で点検改善するのか、そのような事も議論の対象になる。また、関連する先生方が意見を出し合うときに、先生同士仲が良いので意見を言いづらい、本音があっても言えない、という場合もある。そのような場合、私情協や学会のような第三者機関やコンソーシアムにデータを出して、そこで到達度や平均値等のデータについて意見を伺い、振り返りに反映させる、という方法も考えられる。実際に、振り返りのところで先生方が意見を出し合えるのか、ということ踏まえて点検評価改善を考えて頂きたい。

2. 授業の点検・評価・改善

授業評価の方法についての議論に先立ち、委員より以下のような意見が出された。

- ・ 学生アンケートについて、学生はアンケート慣れしており正しく答えない。同じ答えを書いてくる。
- ・ 良い点数を付けた先生には圧倒的に良い結果が出てくるが、それは学生の本音ではない。
- ・ アンケート結果は授業形態によっても違いがあり、手を動かす授業即ち実習と講義では実習の方が高い評価となる傾向がある。また、学生の質にもよる。
- ・ 教員間のアウトカムズや同じ分野で話をする機会はない。大学は各分野1名しかいない。
- ・ 専門科目間で話し合うことは必要。ひとりの先生が自分の出来ることしか教えないのでは偏りがある。
- ・ 教える内容が重っている場合など同じ分野の人が集まって調整すればよいのだが、全くなされない。
- ・ FDで授業公開しているが、誰も来ないし行く暇が無い。
- ・ 学生への教え方は各先生工夫をしている。FDよりも先生方の情報交換のほうが重要。
- ・ 良い方法の授業をしている先生の授業のしかたを持って来ても合わない場合がある。
- ・ むしろその学科でどういう学生を育てたいか、そのためにどのようなカリキュラムが必要か、カリキュラムの内容を合意する場があるとよいのだが、およそ無い。分野毎にお任せのようになる。
- ・ 自分の城のようなバリアを解かない。余計な口出しはしないでほしい、今まで築いてきたものが無になってしまうような労苦を望まない。
- ・ 成績評価も甘い先生がいる。学生は授業に出れば単位もらえると思っている。
- ・ 非常勤の先生はアンケート結果が悪いと切られてしまうこともあるので良い評価を出す傾向がある。
- ・ 単科大学は外からの評価にさらされており、比較的教員が結束している。経済やファッションなど日本が置かれている厳しい状況がすぐに反映する。
- ・ 現在の大学3年生はゆとり教育世代で、考えることや先の見通しができない、約束は守らない、期限があっても「何とかなる。」と漠然と思っている。具体的に計画を立てることができない。
- ・ 大学の4年間で基礎の基礎からやらなくてははいけない。
- ・ 「バイトでもいい」という感覚。学んだことを活かすプライドなどが見られない。
- ・ 前世代の学生の例をとって説明しても勉学の意欲や就労の意欲が出てこない。
- ・ 学生全体の質が落ちている。日本を憂う。日本全体が疲弊、弱体化している。親世代も。
- ・ 大学では、学習を語るよりも学生指導のような保護のほうが必要となっている。
- ・ 中学高校の先生方は出せばよいと思っている。まともな子は社会にでるのが怖いので陰に籠る。

- ・各分野に優秀な子もいるが、気を病んでいるファクターも現実としている。つぎつぎに出してしまえばよいという（小中高に対して）、大学教育はどん詰まりなので社会で働く意欲などで先生方は翻弄されている。
- ・女子大の場合、卒業できない学生が多いと大学の評価に係るので残さず、なるべく出すという考えがある。就職率を上げるとか。
- ・留年すると家庭の高負担となる。学生ローン返済も大変で、自分で担っている学生もいる。
- ・二極分化ということがあらゆる方面で顕著である。できる子と出来ない子、持てる子と持たない子。
- ・日本のように在学期間を決めずに、ある単位が取れたら卒業させるような仕組み、学士力が付いたら卒業させるような仕組みを望む。
- ・大学就学率、欧米では 25 才以上が 20%、日本は 2%。一度社会に出てからの方が、勉学意欲がある。
- ・授業モデルを一つの目標とするのはよいことである。点検をどのタイミングでするのか。
- ・オムニバス形式で材料、デザイン、設計の合間に評価を入れられる。
- ・カリキュラムマップを作り、其々の先生の役割を明確にする。
- ・授業期間中に 2~3 回程度の授業担当者による到達度の確認をしてポータルサイトに公開、情報を共有する。3回の点検は、材料、デザイン、設計各々 4回の授業と 2回のプレゼンテーションと考える。
- ・学生の e-ポートフォリオを提出させ、フィードバックを外部評価共有する。

決定事項

教育改善モデル（その 1）の授業の点検・評価・改善

この授業モデルを点検・評価・改善するためには、授業期間中に学内担当教員が材料特性を活かしたデザインの決定、あるいはデザインに適した材料選択、衣服製作などの到達度の確認を行い、ポータルサイトに公開して情報を共有し、改善に向けた対策を検討する。必要に応じて、教員、専門家などを含む外部者を交えて意見交流する。

教育改善モデル（その 2）の授業の点検・評価・改善

この授業モデルを点検・評価・改善するためには、授業期間中に学内担当教員がアパレル産業の構造と生産プロセス、マーケティング手法、アパレル製品の企画などの到達度の確認を行い、ポータルサイトに公開して情報を共有し、改善に向けた対策を検討する。さらに、産業界の専門家などを含む専門家などを含む外部者を交えて意見交流する。

3. 今後の検討スケジュールについて

今回は教員の教育力について審議する。今後の活動として、学士力の到達目標を達成するための教育モデルに図や表を入れた冊子の作成が予定される。

V. 次回の開催日程

日時：平成 24 年 2 月 21 日（火） 11 時 00 分から

再度メールにて出欠の確認を取る。

場所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室

以上